

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

NO. 346

学力研の広場

2024. 1. 9

学 力 研 発 行

常任委員長 岸 本 ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

今月の広場の特集テーマは、「平教師が学校を変える！」です。これは、学力研の久保齋先生がよく使うキャッチフレーズなので、耳にされた方も多いのではないのでしょうか。

一昨年の冬のフォーラムで、久保先生が「疎外」について話されていました。「本来心地よいはずなのに、心地よくない状態のことを疎外という。教育における疎外とは、教育のシステムが整っていないこと。システムが整っていれば、教育はうまくいく。教師である限り『構想』すべし。『教え』がないところに教育はない。子どもたちには、『模倣』と『共同』で『習熟』させる。テスト勉強をしたら必ず評価をする。そして再び『構想』する。これが、教育のシステムである。100点が取れないテストにするから子どもは嫌がる。テスト勉強を共同でさせる。100点を取らせる準備をする。そうすれば子どもは輝く。疎外の原因を取り除くことを私たち教師は考えなくてはいけない。『テストしてー!』という子どもをいっぱいしよう。まずは、自分のクラスで100点を取らせる。それが、日本を変える!社会を変える!!平教師が学校を変えることなんだ!!!」

CONTENTS

◇特集「平教師が学校を変える！」◇

教育困難を共同の取り組みで克服する～学校ぐるみの学力づくり～図書啓展・・・	2
管理職になって、学校について考える	井上佳和・・・4
学力の基礎をきたえどの子も伸ばす取り組みに	根無信行・・・8
平教師が学校を変える！	山口左知男・・・11
挑む — 情熱 気力モチベーション —	丸小野聡暢・・・16

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載63「意欲格差」に負けない!公立小学校へ	岡本美穂・・・18
考える力をつけるための授業の組み立て方⑤()に当てはまるものを考えさせる	荒井賢一・・・20
社会科(歴史)授業力アップ講座 ⑫ 素材研究④	深澤英雄・・・22
「第17期 先生のための学校・オンライン・4回目」報告	丸小野聡暢・・・24
「冬のフォーラム」報告	井川有香子・・・27
局長・常任委員長だより	・・・29
学力研カレンダー	・・・30

※久保先生の連載は、都合により休載させていただきます。

教育困難を共同の取り組みで克服する「学校ぐるみの学力づくり」

図書 啓展（ずしょ ひろのぶ）大阪みなみ学力研

私は3校目に赴任した学校では、いきなり前年度「学級崩壊」した6年生の担任に。本当に苦しかった。逃げ出したかった。でも次の年には、周りの教職員がバラバラで各々子どもたちに苦勞していることが見えてきた。教育困難は一担任だけで担えるものではない。

しかし、ピンチはチャンス。そういうときこそ創意や勇気が生まれる。私は学力研や教育研究活動で学んできたことを基に実践の提案をした。そしてみんなで「学校ぐるみの学力づくり」に足を踏み出したおかげで、教育困難の苦しみから脱出できた。共同こそ要だ。それ以来、学力の基礎の充実・授業改善と、教育困難の解決を統一してとらえ、学校ぐるみの共同で実践することを追求してきた。

●コロナ禍の計算力実態調査からの出発

新型コロナウイルスの感染が急速に広がる中、4年前の3月に始まった一斉休校。

4月に6校目の学校に赴任し、私は算数科と書写の担当となった。分散登校を経て

全員授業が再開されたのが6月。学年団の先生方と相談の上、担当する3年生と4年生の子どもたちを対象に、計算力実態調査を実施した。3年生は1・2年生の問題、4年生は1・2・3年生の問題各10問ずつだ。

その結果に驚いた。一例をあげる。

4年生は、誤答率が $9-2+4$ （1年問題）が約17%、 $107-88$ （筆算・2年問題）が約20%、 $4-1-1$ （筆算・3年問題）が約37%と、ひき算の定着度が低く、かけ算九九の習得が不十分な児童も多く、さらに一斉休校の影響もあって、 54×87 （筆算・3年問題）の誤答率は約30%だった。また、 $61-9$ （3年問題）も約30%の児童に誤答が見られた。3年生もよく似た傾向が見られ、 $107-88$ （筆算・2年問題）に至っては誤答率が実に約52%にのぼったのである。

計算力は算数科の基礎的な技能であり、問題解決への土台となる力、さらには学力伸長の牽引車である。その計算の理解・習熟

不足は大きな課題だ。この実態を踏まえながら、算数科のカリキュラム作り、授業づくりを進めた。その中で困ったことは、

- ・学習の道具が本当になかなか揃わない。
- ・授業では問題を何とか自力で解けても、翌日はすっかり忘れている子が多い。

ということだ。周りの先生方の意見も同じで、本校の特徴だとも言われている。背景には地域や家庭状況もあるが、やはり学校として取り組めることから始めた。

●計算力・漢字書字力調査で実態をつかむ

まずは調査で、子どもの実態をつかむ。一年間の取り組みの成果と課題を年度末に提案し、赴任二年目の4月からは計算力・漢字書字力調査を2年・6年生で実施できた。その結果をもとに個々のつまづきや全体のつまづき・習得度を全教員で共有した。

漢字書字力では、前学年の漢字の得点が50点以下の児童の割合は、4年生が50%、5年生が56%、6年生が60%と過半数に及んでいた。

このような実態は、学校として「基礎基本の取り組み」が不可欠であることを教えてくれている。学力（の基礎）実態を明らかに

して、共通理解を図ることが学校あげての取り組みのスタートだ。

●「さかのぼり学習」は基礎計算の習熟・漢字の読み先行から

既習学年にさかのぼって復習し、基礎を習得・習熟させる「さかのぼり学習」。しかし各クラス任せでは成果は生まれない。熱気が生まれるように「計算チャレンジ月間」「漢字チャレンジ月間」(「読解力チャレンジ」「読書チャレンジ」もある)を設定し、学校ぐるみで実態改善に取り組んできた。

4月の「計算チャレンジ月間」では2〜4年で繰り上がりのあるたし算・繰り下がりのあるひき算・かけ算九九・基本わり算の習熟に取り組む。九九のあいまいな子が多いので、「かけ算お助けシート」を持たせて、(子どもによっては家庭用と学校用)九九覚えを担任の先生と協力して進めた。九九カードも購入して活用。同時に、シートがあると授業でも見ながら自力で問題ができる。9月の「計算チャレンジ月間」では「基本わり算C型」(の「ト」など余りで繰り下がりのあるわり算)の習熟を4・5年生で取り組み、子どもたちは自信をつけてきた。

「学校あげての取り組みをしつつ、並行して定着しにくい子に個別指導をしていく」という方法はかなり有効である。子ども同士の励まし合いもいろんな場面で生まれる。ただ、やればとても集中して取り組む「百マス計算」には、部分的にしか取り組めなかったクラス担任としての裁量が必要である。

漢字のさかのぼり学習は、「リズム漢字」

を活用し、前学年の漢字が読めることからスタートしている。「子どもが喜んで音読している」と好評。同時に「読み上げ漢字」(鈴木基久氏作)を活用して、当該学年の新出漢字の読みを先行させている。これも、「聞いて」と、子どもたちが喜んで取り組んだ。まず「漢字を読める」ということが第一歩だ。

6月の「漢字チャレンジ月間」では、このほか掲示板に「漢字クイズ」を貼って興味関心を促している。朝、楽しんでいる子どもたちの姿が微笑ましい。心地よさをめざす。

●当該学年の基礎学力の習得こそ本命

年々取り組みが進化し、11月・12月を「漢字計算チャレンジ月間」として設定し、計算は「〇年検定」(「計算つまずき克服プリント」所収を編集)を全校で取り組んでいる。

漢字は「漢字一字プリント」の一部を活用しての取り組みが好評である。

11月末の計算・漢字調査(2回目)では前学年と当該学年(の履修分)のテストでこの間の取り組みの成果を見ている。

2月・3月は「計算・漢字チャレンジ」で当該学年分の習得を図り、3回目の調査。

●できた！わかった！つながった！

私は四則計算の総決算である「二位数で割るわり算」を四年連続で教えてきた。一年目は本当に苦労した。わり算どころか基礎計算がボロボロだったからである。しかし、1年生からの取り組みの積み上げのおかげで、二位数で割るわり算も年々習得率が上がり、子どもの笑顔が増えたのを実感する。残念ながら6年生はコロナ禍でのハンデイーがまだ残り、課題を残している。

しかし、このように「さかのぼり指導」を柱とし、算数の少人数授業も取り入れて学校ぐるみの学力づくりを進めた三年間。計算や漢字の力の底上げがなされて学力格差が縮まり、平均点もアップしてきた。このことにより、子どもたちは授業での学び構えができ、全体として落ちてきている。

管理職になって、学校について考える

加印学力研 いろえんぴつ 井上 佳和

管理職になりました

今年度から、教頭になりました。私は、一般企業で働きながら通信制の大学に行き、免許を取り教師になりました。教師になって、こんなに楽しい仕事があるのか！と驚きでした。しかし、管理職になりました。いろいろ理由はありますが、担任業が嫌になったわけではありません。管理職になって、見方は大きく変わったかは良く分かりません。見える範囲は広がったでしょうが、根本の思いは、学力研で学び培ってきた、「どの子も伸ばす」です。

管理職になって感じる

教師は、つくづく時代の風潮に振り回されていると感じます。社会が勝手に、先の見えない時代だとまくしたて、それに合わせた教育をしないといけないと躍起になっています。

GIGA、学力テスト、(今はもう話題にならない)アクティブラーニング、そして個別最適化、声だけの働き方改革、AIを教育に？それ以外にも、子どもに合わせる事が全て正しいと考える風潮。そして、何よりも、コロナ禍による価値観の変化。

AIが人間の教師のように、指導をしてくれるのでしょうか。前に、新任教頭の研修で雑談をしていた時に、こんな話を聞きました。AI漢字ドリルでなぞり書きをしていた子どもが、何度やってもはみだし、AIに合格がもらえず泣いてしまっていた。それを見て、「大丈夫だよ。」と声をかける教頭先生…。

タブレットが全てを解決してくれるような幻想にとらわれているニュースも。タブレットを使って、子どもの内面を探ろうとしたり、学習の苦手な子(ただ学習が苦手なのではなく様々な要因をもっているとい

うのに)を救おうとしたり、関係づくりをしようとしたり、使って意見を表出させようとしたり…。集中していない子を表出するICT機器の話題をニュースで見ました。今、我々教師は岐路に立たされています。To be or not to be.です。「このまま流されていくか否か」

「PISAの報告書の中で、『教師は、現在の学校で最も重要な資源である。』(『デジタル馬鹿』ミシェル・デミルジェ 花伝社)

公立の小学校とは？

社会のニーズは常にエスカレートします。斬新なアイデアを競い合い、気づけば、次の新しい風潮が生まれていきます。ネットでもテレビでも、一般の人だけでなく知識人たちも、当たり前のように先鋭的な実践をしていない教育を平然と「時代遅れだ」と煽りたてます。市場経済のニーズについていけないことが時代遅れなのでしょう。か今小学校で学んでいる子どもたちが大人になったときには、そのニーズは大きく変わっているのに。検証もされない目新しい実

実践をしないといけないのでしょうか。

教頭になって半年、様々な課題に対応していますが、対応には理念が必要だと痛感しました。判断や思考の柱です。そもそも学校って何？教師とは何？校則って何？と立ち止まり、先生方と共有しておかないと、その時の雰囲気や流行、時代時代の価値観に振りまわされてしまうことになります。

教育基本法第1条「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

「学校は、すべての子どもたちが何らの差別もなく、科学と心理に裏付けされた知識・技術・判断力を身に付け、社会の一員としての道徳性・公共性を備えた市民となり得るよう、計画的・継続的に教育を行う人的・物的組織体で、社会のすべての構成員によってその設置・維持が承認され支持されているものです。」（新日本法規出版）

今、自分なりに解釈すると、

第一の前提は、学校は「公」だということです。私である「家庭」で過ごしてきた

子どもたちが、「公教育」が行われる学校に入ってきます。一方的な価値観にとらわれた各家庭から子どもたちを取り出し、公の中で過ごすことで価値観を広げているという事実に向き合っていて、私は公立学校があることに感動しました。もし、12年間、「その」家庭で過ごしていたらと思うと…。子どもたちを「学校」という社会であずかるこの制度は、社会にとっても個人にとっても重要な仕組みです。

第二は、「民主的な活動」の基礎です。個性の違いに気付き、その違いを大切にすること。そして、合意形成することです。民主主義的な手続きを学ぶ場でもあります。

第三は、確実に「知識・技能」を身に付けることです。社会人なるためには、基本的な知識や技能が土台となります。その土台は、もちろん読み書き計算ですが、それだけではなく、学習の喜び、成長の喜び、みんなで学ぶ良さを知っていることも、基礎的な学習力でしょう。

これらは、学校は地域の共有財産です。地域の人々が関りながら、地域の教育の中心地として大切にするものであり、地域の

安定・発展のために、学校があります。ただの、教育サービスの提供者ではありません。塾には、公の意識などありません。

教員育成システムのずれ

教頭となって感じたことは、若手の先生は、授業以前に、集団を操ることに苦しんでいるということです。私も、経験が浅い時に「子どもたちが、私の言うことを全く聞いてくれなくて、クラスが荒れていく」夢を見てうなされました。

「今年の新任は…。」〇〇小学校の新任は…。うまくクラスを切り盛りできれば〇、出来なければ×という具合に、若い先生方の能力を評価する声が聞こえてきます。一年間乗り切れるかは、その先生の持ち合わせた技量（体力？精神力？運？）にかかっているのです。さて、先生方は、集団を扱う術を誰から学んでいるのでしょうか。太学でこと細かに指導を受けていません。教育実習は、担任の先生が作り上げたクラスで行われます。もちろん、崩れたクラスでの実習はありません。採用後の学校の研修は、はるかに高いレベルのことを扱ってい

ます。経験の少ない先生にとって必要なことは、今まさに、目の前の子どもたちをどうするかです。保護者の不満をどう乗り越えるかです。一年間耐えろ！でいいですか。

「今年の新任は…」と言いますが、これは「組織の問題を、個人の問題にすり替えている」発言なのです。学校には、人を育てる仕組みがありません。教育の場である学校が！です。

では、育成をどうしよう

本校はそれでも熱心に若手を育てようとしています。しかし、私が思うのはもっと前段階です。そこで、研修担当の先生に、基本の技能を習得できる研修をしないかと相談しました。先生方も若手の先生をどう育てていくかと考えていました。そして、2学期の終わりから、ミニ講座を開いていただくことになりました（本当は私がしたいですが、組織を育てる必要がありますので）。まずは、「音読の仕方」「鉛筆の持ち方」「整理整頓の仕方」「準備の仕方」からです。私が研修担当に出した希望です。

・30分は長いので一講座10分程度

・毎週開催

・まずは理論よりも技能を

・レジュメを用意

・3年未満の先生は必ず

・希望者も参加できる

育休明けの先生方も参加されていました。育休明けの先生は、家庭での生活から急転担任となります。忙しい上に、家庭には幼い子がおり、家庭でも大忙しです。気づけば若手主体の学校組織の中で中堅に位置付けられており、責任も仕事量も増えています。実は、若手以上に不安を抱えているのかもしれない。

私の構想ですが、若手の先生が自分たちで研修テーマを考え、実践・振り返り・取り組みをプレゼンするというアイデアもあります。若手の先生が身に付けたいことと学校の研修テーマには大きな開きがあります。レベルの高いテーマを、上から言われてよく理解できないまま取り組んでも、あまり実りはありません。それなら、今自分たちにとって、目の前の子どもたちにとって必要なテーマについて、追及すればいいのです。私は、担任時代に毎年新しいこと

に取り組んできました。何か新しいことを試していると、仕事がとても楽しいのです。これが、教師という仕事の魅力でした。

自分で考えて自分で試して、自分で振り返る。まさに、今求められている教師（社会人）像でしょう。さらに、組織にとっても大きなメリットです。若手の教師が自分の考えを述べられる組織ほど、強くなつていきます。

学力研で学んだのは、基礎の大切さです。「計算は学力の牽引車」など、基礎が身に付くことで、学習意欲は波及していきます。基礎があるからこそ、応用です。それは教師も同じです。基礎を身に付けることで、大きく伸びていきます。

また、学力研では、目の前の子どもたちの実態を掴み取り、どうやれば伸びていくのかということも学びました。100マス計算しかり、やみくもに実践するのではない、科学的で工夫一杯の実践が学力研の魅力でした。

私は、今の勤務校で基礎を身に付け、教育欲がわいてきた先生方が、次の学校で大きく活躍してくれるような仕組みを作りたい

いと考えています。「〇〇小学校から来た先生方は、力もあるし、楽しそうだな。」って言われたら、そんな素敵なことはありません。

保護者との関り

もう一つ感じたのは、若手の先生は（若手だけではありませんが）保護者対応に苦しんでいます。保護者は、若い先生だからと言って、自分の価値感を押し付けてくることがよくあります。保護者からすれば押しつけではなく、意見でしょうが。それは「公」の意見ではなく「私」的な感情であることも多いです。

もちろん、保護者の意見は聞くべきことは聞きます。教師にとって、耳の痛いことですが、聞くことによって今後の指導の幅が広がることも多いです。しかし、若い先生方はその意見全てを正面から受け止めます。自分の指導のふがいなさを全面的に認めてしまいます。今年、保護者からの苦情を聞く中で、「プロでしょ。」という言葉を数度聞きました。もう、教師の不手際や未熟さを温かい目で見ようという感覚は保護

者にはありません。

公立の小学校にとって大変なことの一つは、顧客を選ぶことが出来ないことです。目の前の子どもと言いながらも、子どもの後ろには様々な保護者がいます。彼ら、彼女らの言い分はあくまでも「私」です。

価値観のすれ違いは、話し合って折り合いをつけていかなければなりません。それが、多様性です。保護者の言い分をすべて受け入れることではありません。地域の学校であるという理念を共通理解し、学校も保護者同様、子どもたちのために取り組んでいるのだということを伝えなければなりません。

そのためにも、「正面から受け止めず、かわす。」「意見とクレームを分けて聞く。」「組織的に対応する。」「学校の理念を伝える。」「傾聴の技術。」「気分転換の仕方。」「これらのノウハウが無いと、辛い目にしか合いません。対応の技術、メンタルトレーニングを学ぶ機会は必須です。

ストーリーを描こう

一人の子どもが、〇〇小学校に入り学ぶ

ことにどんな物語があるのでしよう。

小学校には、学びに向かう熱心で個性的な先生方がおり、子どもが自立に向かう基礎を鍛えようと、温かく、厳しく、優しく、接する。父や母と違う、信頼できる大人と関わり、公の中で大切にしてもらうことを経験する。

個性や家庭環境、考え方の違う同級生と一緒に生活をする。喧嘩もいざこざも経験し、解決する機会があり、人との関わり方を体験する。人に喜んでもらえるとうれしいと感じる経験、様々な行事でみんなと一緒に目標に向かう経験。何よりも、人と違っていていいんだと思えることを経験する。

勉強が難しい、もうやめたいと思うことがあっても、皆が励ましてくれる。先生が様々な方法を教えてくれる。粘り強く取り組み、出来るようになる。これからも、頑張ったら乗り越えられるのだと思える。学ぶ喜びを体感する。

涙と笑顔で卒業し、中学校に送り出される。将来、自立した大人となり、人を大切にし合う地域を見守る。その未来でも、子どもたちの笑い声があふれている小学校。

学力の基礎をきたえどの子も伸ばす取り組みに

大阪 根無 信行

昨年十月頃のことです。勤務市の各校それぞれのホームページに、その年の全国学力・学習状況調査の結果がまとめられた報告書が掲載されていました。全国や府と比較できるように並べられた表に、その学校の正答率・ポイントが数値で示されていました。教師としての興味もあって、各校HPを検索して、そのデータを比較して見てみました。この学校は、算数のこの単元が府よりポイントが高いな、国語で漢字が比較的低いな、などということが、並べてみると分かります。そう考えながら見ているうちに、学校間でこんなにポイントに「差」があるんだ、ということも見えてきました。来年同じ中学校区になるこの学校とこの学校は、これだけの差をもって進学してくるのだ、と思って見た時に、自分の考え方がずれてしまっていたことに気づきました。他の学校との比較では、地域、家庭環境、クラス人数、まったく違う集団なので、結果に違いはあってもあたりまえです。そのよ

うな背景には現れないポイントを単純に「比較しても何かが分かることはなく、まして府や国の結果と比較することも、その集団の構成が違うので、一見では分からないことが多いこと、さらに、同じ学校で前年度の結果と比較することもあります。学年集団が違えば、結果のポイントに上下があることも当然なのでした。同じ学校でさえ、同じ指導をしても、学力に違いが出るのは、「集団」が変わるからです。なので、学校が（教師が）学力調査の結果を分析し、活用するのは、目の前の子どもたちの実態を知り、その子たちをどの子ものばすことを目指した手立てを考えるためだと思い直しました。他校との比較は、教員間でどんな取り組みをしたかを交流するきっかけにはなりません。しかし、教員でない親御さんがHPを通して見られても、あの学校よりこの学校が高い（低い）という感覚だけになってしまいます。それは、学力調査の結果を、結果としてしか使えない親

御さんには、かえって不安を与えてしまっています。ですから学校は、他集団との比較ではなく、目の前の子どもたちの集団の現状をその学校が必要と思った調査内容で正しくとらえ、子どもたちの現状をふまえて、取り組みでもって子どもに返していくことが大切だと思います。

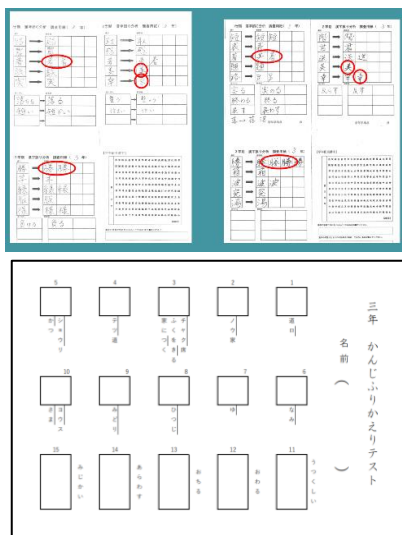
一、役立つ学力調査は学校単位で

前置きが長くなりましたが、学力調査を行うなら、学校単位がいいと思います。それも、なるべく学習の基礎となる計算や漢字から始め、毎年同じ問題であるのが良いと思います。そうすることで、その集団の傾向を経年比較でき、昨年の集団と比較することではなく、前回の調査よりどれだけ子どもたちが伸びたかを見て取れるからです。目の前の子どもたちはどんなところが課題であり、その課題を解決するためにどのような手立てで学力づくりに取り組むかは、現場にいる教師（平教師）だからこそ、学校ぐるみで分析して、手立てを考えられるのだと思います。また、「〇〇先生でなきゃだめ」ではなく、どの学年であっても、誰が持つても、学校ぐるみで子どもをとらえ、必要な学力をつけて学年を次に送っていく、そんな方向性を大事にしたいです。

そこで次には、学力研で学ばせてもらった、学校ぐるみで取り組める学力づくりを2つ紹介します。

二、漢字ふりかえり

本校では、コロナ禍前の2017年から、それぞれの学年で、学期末ごとに、誤答の多かった漢字を集約してもらっていました。漢字は、学年集団が違ってても、誤答が重なるものがあります。

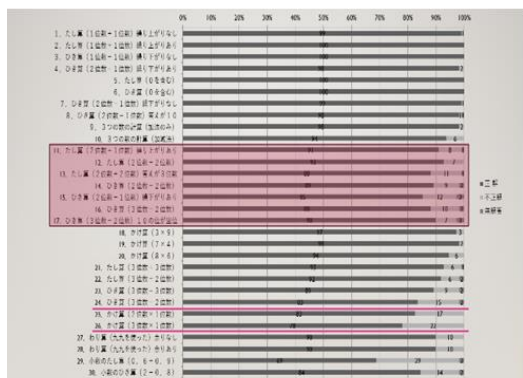


す。それが、子どもたちの覚えにくい、間違えやすい字だと分かります。そしてそれをもとに、二年間で重なるの多くあった誤答漢字を集めた「漢字ふりかえりテスト」として作成しました。

四月に、前学年のテストをし、一学期中にさかのぼり学習をして、七月に同じ問題をします。三学期には、当該学年のテストをし、次年度にデータを送る、という流れがあります。これは漢字の学年の積み上げを意識した取り組みで、一年間その後も見据えた取り組みとして、学校ぐるみで行っているものの一つです。学年配当漢字(3年生でも200字)を、全て調査するのは大変ですが、間違いの多かった漢字に絞り、調査後にその漢字に焦点を当ててさかのぼり指導をすることで、課題の改善につながるくり返しの学習ができます。この間違えやすい漢字を見つけるのも、その学校にいる教員が学校ぐるみで行ってくれるからこそ見つけられるものです。

三、計算ふりかえりと習熟

本校では、基礎計算の力をつける目的で、「えびチャレ(えびす小学校チャレンジ)」と名付けた計算プリントの運営を行っています。自分が所属する校内の学習指導部でプリントを作成しました。学年別、単元別の型分けをした、5分程度でできて、答えも自分で合わせられるものです。そして後述の計算ふりかえりテスト



計算ふりかえりテスト(3年生)			
3年 組 名前	5 6	2 5	5 7 6
	+ 7	+ 4 3	+ 2 8 7
① 3 + 6 =	② 7 + 8	③ 7 3	④ 4 3 4
		+ 6 8	- 2 5 7
③ 9 - 2 =	④ 11 - 4	⑤ 5 0	⑥ 5 0 0
		- 2 3	- 4 6
⑤ 5 + 0 =	⑥ 12 - 0	⑦ 8 1	⑧ 7 3
		- 9	x 5
⑦ 17 - 4 =	⑧ 12 - 2	⑨ 1 2 4	⑩ 3 8 4
		- 5 6	x 8
⑨ 5 + 1 + 4 =		⑪ 1 0 6	⑫ 3 x 9 =
		- 2 7	
⑪ 10 - 6 + 3 =		⑬ 7 x 4 =	⑭ 8 x 6 =
		⑮ 56 ÷ 7 =	⑯ 43 ÷ 9 =
		⑰ 06 + 09 =	⑱ 2 - 08 =

の問題の練習用に対応させています。解答したプリントはすぐには持ち帰らず、1か月間クリアファイルに保管して学校に置いてきます。月末にカードとともに持ち帰ることで、おうちの人にも実績を見てもらいます。

えびチャレの取り組み方、組み時期、時間は、各学年、各クラスの都合の良い時間に毎日実施することとしました。(毎日取り組むことを目指すが、行事、時間割等、できない時間はクラス裁量としています。)この裁量というのが学校ぐるみで続けるコツだと思っています。

扱うプリントは、2年から6年では、学習の剥離を意識してさかのぼりで習熟を図るために、前学年のプリントをすることもできますし、学習中の単元に必要な計算プリントをえびチャレとして使用することも可能です。そして、この実態の子どもたちにとの計算力を習熟させる必要があるのかを見つけるため、またどのくらい

の力がついたかを調べるのが、校内計算力調査です。

前年度までの学年の基礎計算を集めた調査テストを六月に、当該学年のものを追加して一月に行い、つまずきの把握と指導計画に生

かします。

例えば、4年生(3年生までの計算)でとくに目立った誤答が、3けた×1けたの計算、空位のあるひき算であったり、わり算筆算にあまりがかかると誤答が増えたりすることが見つかります。なので、わり算のために、九九やくり下がりはひき算の再定着が必要だということ、さらにはかけ算の筆算もわり算にかかわってくるので練習がいるのだと学年で分析し、さかのぼりで基礎計算練習をし、わり算筆算に取り組むと言つぷに進めていきます。

四、校内研修の役割

最後に、校内研を大切にすることも、「平教師が学校を変える」と繋がると思っています。

個々である、目の前の子どもたち、それぞれが集まった集団を、経年で見守ることができ、その子どもたちのよさや苦手とする傾向もつかんでいる現場の教師だからこそ、その学校の子どもたちの学力を伸ばすために何が必要かを考え、話し合うことができます。その話し合いから出発するのが校内研だと考えています。学力調査の結果を見て、他の学校よりポイントが高い(低い)の比較だけでなく、子どもた

ちに必要な力は、どんな問題を解けるような力なのか、その力を伸ばすためにどんな取り組みを学校はしていくのか：など、今受け持っている子どもにも焦点を当てた見方で作っていきけるからです。子どもスタートです。

学力研では、目の前の子どもを出発点とした、みんなのできる、どの子も伸ばす学力づくりの実践を学ぶことができます。これさえすればこの力がつく、という万能な実践はありませんが、子どもに寄り添った、裏付けのある実践を現場の先生方が研究されています。本校が計算力調査を行うことになったのも、漢字のふりかえりを始めたことも、学力研で教えてもらったことをきっかけで、その取り組みを始めるために、学力研の先生(久保先生・岡先生・深澤先生)に校内研に来ていただき、学校ぐるみで取り組む大切さを話していただいたからです。この実践が良い、取り組みたい、と思って始めたことが、子どもたちの力を伸ばすことに繋がったのに、ひとクラスだけ、一年だけで途絶えてしまったのは残念です。そういった取り組みを学校ぐるみで行い、成果や課題を今日する場が校内研であつたら、「平場の教師が学校を変える」ことになるのだと思っています。

平教師が学校を変える！

春日井学力研 山口 左知男

すごいテーマをいただきました。大層なこととお話できませんが、昔話を少し。

今大学で小学校課程と幼保課程の授業を担当しています。最近の授業での学生さんの感想です。

「私は自分自身に対して『自分は好奇心を様々な所に向け、挑戦する意欲を持っている』と思っていますが、失敗の怖さ、自分の能力に対し期待が持てないということから、その意欲や挑戦するチャンスに応えることができないということに悩んでおり、教育福祉学部で幼稚園教諭を目指しながらも本当に自分の力でできる仕事なのか、結論を出せずにいます。しかし、今回の山口先生の経験、経験から学んだことを聞いて、『先生だって失敗することもあるんだ』『先生だって失敗しても改善しようとするればそれでいいんだ』と気づき、おそろおそろでも自分が長年持ってきた夢の実現に姿勢だけでも忠実にしたいと思いました

た。今の教育が抱える問題についての話を様々な講義で聞くと暗く不安な気持ちになりますが、自分なりに後悔のない仕事ができるように頑張りたいです。」

彼女たちが自分の生き方に対しても教育・保育現場に対しても異口同音に言うのは「失敗が怖い」「間違いが恥ずかしい」「挑戦できない」「他人と比較してダメだと思う」という言葉です。彼女たちは、曲がりなりにも公立大学に進学してきているのだから、それなりに勉強はできた子たちです。字を見てもしっかりしています。それでいて（それだからこそ）自己肯定感は育っていません。

そんな彼らに、私は自分の若い頃の数限りない失敗談を話し、「こんな教室、こんな学校、こんな園に」という失敗から見つけた今現在の「結論」を話しています。学生たちは、「失敗は財産」「失敗の分だけ子どもの気持ちがかかる」という話に安心し共感するようです。

授業の中で学生たちが意外と食いついてくのが、四半世紀以上も前になる私の中学校時代の実践です。（私は、40年間小中学校で仕事をしてきましたが、前半16年間は中学校におりました。）

「中学校の卒業式の実例を聞いて、悪いことを繰り返し子どもに対しては怒るしかないと思っていたが、怒らなくても子どもの行動や考えを変えられることが分かり驚いたし、そんなアイデアを思いつく先生になりたいと思った。自分の高校までの学校生活を振り返ってみると、友だちとふざけながら受けた授業や先生のどうでもいい話ばかり覚えていて、『この先生の授業、分かりやすく好きだった』と思えることがなく、少し寂しくなった。小学6年生の時に学年が全体的に荒れて、窓ガラスが割れたり、学校でお菓子を食べたりにしていたことがあり、当時のことを母に聞くと『先生たちがあきらめていた。あんたたちが卒業するのを待ってただけだった。』と言っていた。結局先生たちと対立したまま卒業したが、あの時先生たちがきちんと向き合っていたら違ったのかなと感じていたので、改めて先生の子どもの向き合い方を学

ばなければいけないと今日の授業で思った。」当時の中学校は校内暴力全盛の時代です。私が勤務した2校も、いずれも市内の教育困難校でした。新任の入学式から大変でした。特に2校目の後半は2年続けて学校が荒れ、先生に向かってくる子どもの数も多く、校内暴力・器物破壊・授業エスケープが横行していました。一学年10クラスもあるマンモス校です。荒れ方も半端ではありません。

愛知では、当時はどこの中学校も「力」による生徒指導が主流でした。力というのはまさに「力」そのもの。暴力・怒号で子どもを威嚇・屈服させ、部活動などを通して子どもたちをスキシップで手なずける。「力」のある先生というのは、迷わずそれができる人であり、子どもを手なずけるのがうまい人でした。「東の千葉・西の愛知」と言われた管理主義教育を支えていく人たちでした。私たちのような子どもたちの「自治」を主体とした学校づくりを目指すという考えは完全に傍系でした。

しかし、力による支配は、それを乗り越える力と管理のすき間ができると崩れていきま

が現実となりました。卒業式ですら、外へ出て喫煙する生徒が目立ち、3年生の先生たちの落胆ぶりは気の毒でした。

学校にとっては、この大きな「荒れ」は転機となりました。言葉が悪いですが、溺れる者藁をもつかむ、学校のかじ取りがお手上げになって、一年生の生徒指導を担当していた私は、校長に生徒指導の責任者を頼まれました。気は進みませんでした。が、やむをえませんでした。学校再生のために掲げた旗印は「学校は安心なところ、学ぶところ、楽しむところ、仲よくするところ、力を合わせるところ、プライドをつくるところ」でした。核は「子どもたちは何を求めているのか」です。生徒指導の自身は、子どもの内面を育てることに力を注ぐ。子どもに譲らないところは、「いじめ・暴力・エスケープ」の3点だけと合意しました。無論延々とあった校則は一切問題にしませんでした。

具体的な取り組みを二つ三つ。まず、「みんなが席について学ぶ学校に！」。全教科で分かる授業に取り組むとともに、学力不振の生徒の基礎学力を高め、やる気を高める取り組みを進めました。定期テスト前に、各クラスの学

力不振生徒をピックアップし、クラスの垣根を取っ払って集中的な補充学習を全教員で行いました。必ずここからテストに出すと確約をつけて。なかなか盛況で、「ぼくもやりたい」という自主的な参加者も出てきました。

「卒業式これでもか作戦」。前年の悲惨な卒業式を一新したいというのは、全校生徒、教員の切なる願いでした。生徒会で練りに練りました。3年生が感動を胸に卒業できるようにするために、1・2年生の未来を明るくするためにどうするか。まず、当日の朝校門の前に立った瞬間、笑顔と感動が生まれなければならない。校門の正面、3年生の棟の壁面いっぱい卒業生全員の名前を書いた大垂れ幕をかけることにしました。各クラスの筆名人を集め毎日授業後書き続けました。美術部が総力をあげて背面のイラストをデザインしてくれました。次は、教室へ入る廊下。廊下から目に入る向かいの2年生の棟いっぱい、授業後にスーパードで集めた空き缶を使った巨大なお祝いパネルをかけて驚かせる。あとは、会場体育館へ移動する際に間近を通過する武道場に大グラデーション、とどめは会場入り口に折り鶴パネルを設置する。各学

年の学年生徒会、生徒会執行部が担当し大勢の有志とともにづくりあげました。これでやんちゃする生徒が出たら、もうしょうがない。そういう覚悟で卒業式を迎えました。結果は見事大成功！卒業生の合唱もすばらしく、日頃荒れた言動を繰り返していた生徒たちも笑顔で会場を後にしました。今や市内一の指導力を言われる美術の先生が、「私が共同制作を始めるようになったきっかけは山口先生に言われたことです」と今でも言ってくれるのが嬉しいです。

「ぼくたちの足と頭でつくった修学旅行」。2年続いた荒れを何とか今年で止めたいという強い決意でスタートした3年生。大きなことを自分たちの力でやりとげさせたい。まず、6月の修学旅行をどうしていくのが前半の大きな課題でした。アンケートなど子どもたちの声を聞きながら決定したのが丸二日のフリータイム。子どもたちは喜んだものの、プラン作りと班づくりという大きな課題がありました。学年生徒会での話し合い、クラスでの話し合いを何度も繰り返すなかで、2日間のフリータイムでの班ともう1日のデイズニールランドでの班を変える、デイズニール班はク

ラスの垣根を取り払った人数自由のゆったり班にして、フリータイム班はグループ研修がしっかりやり切れるきっちり班にするということを決着を見ました。プラン作りは、研修先に子どもたちが電話をして了解をもらうことから始め、下見に行った先生の合格がもらえるまで行動プラン、研修内容を何度でもつくり直すという過酷なもの。根を挙げずよくがんばりました。1日目は、新幹線をおりて東京駅で解散、昼食・研修をした後夕飯に間に合うようにホテルに戻る。3日目は、葛西臨海公園で解散、昼食・研修をして東京駅集合。職員が綿密な下見をして緻密なプランを立てさせたというものの、何せ60班の大部分ですから本当に心配でした。しかし、子どもたちは予想以上にがんばり、予定時間の15分前には全ての班が集まりました。最後の班が到着したとき東京駅の構内で思わず子どもたちの中から大きな拍手が沸き起こりました。帰ってからのレポート発表会も大成功。研修先からの評判も上々で、子どもたちの感動と自信、そしてプライドが大いに高まりました。

たびたび困難にぶち当たりながらも、子ども

私たち・先生たちが一緒になってこうした学校づくりを進める中、学校はその後一年で「再生」しました。それができたのも、教育危機という状況に追い込まれていたこととともに、信頼し合える同僚に恵まれたことです。普段は互いの学級の自慢をしても言い合いをしているのですが、いいと思ったことを一つ提案すればそれを前向きに受け止め合い即行動する教師集団でした。学級通信も互いにはり合いながら出し合っていました。自分の学年はもちろん他学年にも私の理解者がいてくれました。先の美術の先生、パネル製作に黙々と取り組んでくれた技術家庭の先生など皆一芸をもった人が多く、私はそれを引き出しつなぐだけのコーディネーター役でした。子どもたちも私たちの仲の良さをよく理解していました。

私にとってこの数年間の中学校での実践は、とても大きなものとして残っています。その後小学校へ転動してからも、私の実践の土台となっています。この中で感じた学力問題への疑問・関心が小学校教育への興味を高めてくれました。

その後小学校に転動した私を支えてくれた

のは、第一に、中学校時代以来続けている学級通信でした。(今も大学で授業通信を出しています。)中学時代は、お互いけなし合い学び

合いながら中身を高めていきました。小学校に移ってから、私の通信の話を聞きつけて、「読ませてほしい」と言われるようになりました。多いときは2/3ぐらいの職員が面白いと言って毎日読んでいました。そういう状況であれば、自然と良くも悪くも私の実践は浸透していきます。管理職にも必ず全員配って感想を聞いていました。お陰で実践に対する理解者が多く、私の出張のときは、代わりに通信を出してくれた管理職もいて、感激したこともありました。

第二に、学力研の「小道具」たちです。岡先生開発「全漢字プリント」、図書先生の「かつとばせ都道府県」、鈴木先生の「リズム漢字」、荒井先生の「絵になる百マス」、三木先生の「割合十字」などなど。学力研で仕入れた技術が職員室の多くの学年で活用されていました。岡プリは全学年で購入していましたし、「かつとばせ」は隣学年と教室を隔てて合唱したりしました。退職後児童相談所に勤めていた元校長が「児相でやったら、あそこの子たちも

これだけは喜んでやっている」とタコ焼きを持ってわざわざお礼を言いにみえたこともありました。

第三は、校務分掌です。私は小学校へ行っただけから、生徒指導に携わることが多かったです。毎日下校指導の際に全校の子どもたちの前で話をしますから、子どもにも先生たちにもそれなりに影響力がありました。子どもの中には私を校長先生と勘違いしている子もいました。

こういう下地の上に取り組んだことは、第一に、卒業式の「改革」でした。愛知は依然として旧態然とした壇上方式が続いていましたが、赴任した学校では全て対面方式に切り変えました。既に対面方式を取り入れている学校もありましたが、そうすると、ステージの背景を在校生や卒業生が工夫して個性豊かな自分たちの卒業式づくりができるようになりました。何よりも親たちにとって「子どもの顔が見える卒業式」になりました。

第二は、校内研修の実体化・簡略化です。先生たちはたくさん先生の授業を見たい、学びたいのですが、研究授業に向けての指導案づくりは大変です。そこで、指導案なしで

授業を見るというやり方を取り入れました。指導案づくりは学びも多いですが、繁忙期に中身のない密案を作らせ、する側も見る側も苦痛だけが残るようなことをしても無意味です。手軽に互いの授業を見合うことのほうが負担なく学べると考えます。職場では好評でした。

話を始めに戻します。最近サークルの話題の中に登場する若い先生方の姿は、あまり芳しいものではありません。「分からないのは子どもの責任にしている」「授業の進度さえ進んでいれば胸を張っている」「授業の基本が分かっている」「先輩の話を聞かない」etcしかし、教師や保育士を目指す学生たちは、自分の将来を真面目に見据えながら、指針がなく不安を抱え揺れ動いている子が多いのです。おそらく若い先生たちの中にも、根底にはそういう思いを持っている人がかなりいるのだろうと思います。現場で頑張っている学力研の先生は、彼らの思いを引き取って、ぜひ豊かな実践を周りに広げてほしいと思います。

挑む ― 情熱 気力 モチベーション ―

丸小野 聡暢

自分にできること

平教師にできることは、クラスの子どもを変えることです。学校現場では、どのような実践をしても、どれだけ理論を語ろうとも子どもが変わらなければ机上の空論です。周りの先生方は子どもを通して先生を見ます。私が担任をするとき、一年後の姿として子どもたちに集団としての自治力を求めます。自治とは、自分たち集団のゴールを決め、それを共有し集団で向かっていく力です。学力研は、授業づくりで学級づくりを研究の一つの柱としています。授業Ⅱ学力づくりと学級づくりを別物として捉えるのではなく、授業の中で共感的な人間関係や自治集団を育てています。学力をつける上で集団の力は必要です。学習とは社会的な営みです。学習は本来、個人のものです。人は集団の中で多くのことを学んでいきます。個人では到達できないけれど、

集団の中でなら到達できるということはありません。そのため、学力をつける行為の中にどれくらい友達との関わりがあるかということを考えなければいけません。授業づくりと学級づくりは往還することでお互いを高めていくからです。

大切にしていること

私が大切にしている指導の一つとしてペア活動があります。自由に立ち歩いて対話することの方が一見活発なクラスに見えますが、誰とでも対話ができるようになるにはペア活動の方が学級づくりには大切です。一年を通じて席替えをしますので、隣の人は子どもの意思と関係なく変わっていきます。誰とでも意見交換ができる人こそ、相手を尊重し、受け入れることができる人ではないでしょうか。もう一つの理由として、クラス全員の発言量を揃えることができるからです。クラスの学習意欲と発言量は比

例します。そのため、一人の子どもがずっと話し続けるとクラスの学習意欲を奪っていきます。クラスのやる気を揃えるためには、授業の中で子どもたちの発言量を教師が調整する必要があります。これは一例ですが、様々な要素を組み込むことで、授業を通して学級づくりを行うことができます。**ベクトルと目的の共有**

学校ぐるみの取組にすることは、なかなか難しいです。学校に大きな課題があるときは、自然とまとまりますが、落ち着いてくるとベクトルの向きが揃いにくいからです。現在勤務している学校では、縦割り班活動が充実しています。毎朝の掃除を縦割り班で行い、月に1回は縦割り班で遊ぶ活動があります。私自身はその取組の立ち上げ当初はいいませんでしたので、先輩方からしっかりと意図を聞き、良さを実感しながら取り組んでいます。長く取組を続けていると人事異動で先生方は入れ替わります。そうなると理念を共有することは難しくなってきます。しかし、大切なことは最初の理念にこだわるのではなく、現在の先生方と目的を共有し、指導のベクトルを揃える

ことです。目的さえ共有できれば、手立ては様々でよいと思います。そうすることで、学校全体で一貫した指導ができます。

指導方法ではなく教育観を学ぶ

私たち平教師は、まずはクラスづくりで同年の先生から信頼を得なければいけません。それができなければ、学校を変えることはできないからです。私は、学力実践や独自の実践にこだわりをもって行っていますが、自ら実践を広げていくことはしません。なぜなら、押し付けると「やらされた感」がでるからです。しかし、良いものは必ず広まります。例えば、大分県では年に3回、全県で取り組んでいる絵画展があります。試行錯誤しながらですが、こだわりをもち取り組んだ結果、一万点の作品の中から一位を取れるほどの指導力を身に付けることができました。私自身は絵を描くことはできませんが、教師は指導力を身に付けることができます。その指導法もじわじわと県内に広がっています。今年度の学年部の先生方は、私の図工指導を知っていましたので、同じ手法で取り組みたいとのことでした。また、たまたま授業を見に

来られた先生が私の社会のノート指導やテスト勉強の方法を職員室に広げてくれました。私は良いものはどんどん取り入れてもらいたいと思っています。しかし、ハウ・ツー論で広がる怖さもあります。なぜ、私がこの取り組みを行っているかという根本を知ってもらいたいからです。図工の絵画指導は、苦手な子も得意な子も差が見えにくく、どの子も伸ばすことができます。賞を取るために技法指導を取り入れたのではなく、どの子も伸ばした結果、賞をいただいたのです。映る姿は同じかもしれませんが、プロセスに学級づくりの教育観が組み込まれているかということが重要です。

学校は民主主義であるべきだ

学校で行う取組は、どのようなことでも一度は全体で議論されるべきです。最近、上意下達で物事が進められていく気がします。学校現場が忙しくなっていますので、上意下達の方が、円滑に物事を進められる良さがあります。しかし、全体で議論されることがない分、しっかりと意図を共有しなければ意味のない取組になってしまいます。学校は、「みんなで話して、みんなで決

める」「下からの意見が議論される」このような民主主義が当たり前のようにできる組織ではないと学校全体の取組には広がっていきません。また、決まったからには一定の期間は全員で続けるべきだと思います。大切なことは、一定期間取り組んだら中間総括をして改善していくことです。そうしていかなければ、学校全体としての取組は続いていきません。

教育とは地味な営みである

教育とは地味な営みです。「自分で学んでは試行錯誤して、吸収できたかと思えば吸収できていないことに気が付いてもう一度悩む」ことの繰り返しではないでしょうか。魔法のように劇的に変わる実践はありませんし、即効性があるわけでもありません。ただ、最近はずぐに成果を求められます。成果だけを求めると魅力的な取組にはなりません。しかし、成果を求めなければプロセスに満足をしてしまい、成長がないのも事実です。取組の過程を大切にしながらも成果を求め、改善をしながら、地道に積み上げていくことが子どもを、学校を変えることにつながると信じ続けていきましょう。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

■11にある『幸せ』に

目を向けることのできる自分へ

YouTubeで樺沢先生の解説動画を見る機会がありました。最初の感想は正直「朝散歩」ばかり伝えてくるという印象で、素直に解説内容も受け取ることができませんでした。しかし「朝散歩」を実践してみると、心が軽くなったのです。それまでの不安がすーっと消えていく喜びがきっかけで、先生のメルマガや書籍も読むようになりました。そして出会ったのが「精神科医が教える 幸せの授業」です。

■幸せは何？

2年生の国語の教科書に「お手紙」という教材があります。この作品のラストには「二人とも、とても幸せな気持ちでそこに座っていました。」という一文が出てきます。2年生の子ども達に「『幸せ』って何

だろう」と聞くと、とても悩んでいたことを思い出しました。

その前の場面で出てきた「悲しい」という感情は、簡単に共感できていたにもかかわらず、「幸せ」はなかなか言語化しにくいものだと子ども達から教えてもらいました。

それ以来「幸せ」は人それぞれで難しいものだ、と感覚的には理解していたのですが、今ではその理由が納得できます。この本を読み「幸せ」は1つではないことを知ったからです。

セロトニンの幸福

オキシトシンの幸福

ドーパミンの幸福

この3つの幸福について正しく知ることが、世の中の「価値観」に振り回されることがなく、変化に戸惑うことなく、幸せに「生きる」ことにつながっていくのだとわかり

ました。

また、樺沢先生は「幸せとはズバリ、脳内で幸福物質が出ている状態のことです。」と主張されています。この幸福物質を整理することが、自分にとっては大きな意味を持つていました。

特に心打たれた言葉をいくつか紹介します。

(1) 幸福には優先順位がある

自分の人生を振り返ってみると、物心ついた頃から父親に「負けたらあかん、がんばれ」と言われ続けてきたこともあり、何事においても勝負をしていました。勝ち負けで「幸せ」を判断してしまっていた自分。これは「ドーパミンの幸福」です。ありがたいことに、健康にも人にも恵まれてきたので、ここまで大きくつまずくことなく生きていた人生でしたが、今年初めて精神的にガタガタとくずれ辛くなったのは、「幸せ」の優先順位を間違えていたからです。「ドーパミンの幸福」ばかりを追い求めていたので限界がきてしまったのです。

当たり前だと思っていた「セロトニンの幸福」、それは決して「当たり前」ではな

いことを知りました。そして「セロトニンの幸福」という土台があるからこそ「オキシトシンの幸福」「ドーパミンの幸福」を積み上げることができる、ということを理解しました。

(2) 幸せは「未来」ではなく

「今」感じるもの

仕事でも勉強でも、努力が報われてきた経験が多く、いつも先を見て「努力する」行動をしていました。次は、次は？と予測して仕事にも取り組んできましたが、それには限界があることを弱った自分を見て感じました。「今」の自分に目を向けること、それはつまり自分や周りの人へ感謝すること、そしてその感謝は「幸せ」につながるということを改めて学びました。それが「親切にすればするほど幸せになれる」という樺沢先生のお言葉にもつながっていると思います。

(3) 人を褒めるコツ

どんな本を読んでも、仕事につなげて考えるくせがあります。教師という仕事

において欠かすことのできない「褒める」ということ。「褒め方」「叱り方」と方法論にした瞬間、子どもたちからの見返りを求めたくなってしまう。「こうやってほめることで、このように子どもは動くだろう。」と考えるようになってしまいうからです。すると、そうならなかった時、子どもが悪いとなってしまうことが多いので、気をつけようと思っていました。今回は「オキシトシンの承認で勇気づける」という新たな視点を教えていただきました。結果にフォーカスしてしまいタテの関係になってしまいう「ドーパミン的承認」の褒め方の危険性について、改めて学ぶことができました。

私はこの本をきっかけに、挑戦したいことも見つかりました。

教師は「授業力」をどうつけていくのか、「子どもの学力」をどう上げていくのか、ということに注目されることが多いのですが、「学級集団づくり」も大切な力です。その観点においても「この3つの幸福」を理解し、整理することで、幸せになる「学級集団づくり」について説明できることが

発見でした。まとめてお伝えできたらと思っています。そしていつか書籍化できたら嬉しいです。最後になりますが、「『ありがとう』は魔法の言葉」という樺沢先生の言葉に、私は励まされました。

不安なりそうになると、朝から「ありがとう」をたくさん見つけて、伝えることで「嫌な感情」を少しずつ追い出すことができました。

ありのままの自分を大切に・・・

幸せになる努力をするのではなく、そこにある、ここにある「幸せ」に目を向けることのできる自分である大切さに気がつくことができたのは、この本のおかげです。

また教育につなげたレポートをお伝えできるように頑張ります。



考える力をつけるための授業の組み立て方⑤

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

() に当てはまるものを考えさせる

自分が思いも付かなかったことを同年の仲間が思いつく。

そのことに「すごい」と感心する子もいれば、「そうか」と悔しがる子もいる。

同じ時間、同じ小学校で、同じ担任のもとで学習していても、問われた答えがそれぞれ違うような、そんな問いをあなたは出しているだろうか。

【板書】 () のおかげで生活できる、

無くなったら困る。

「() に当てはまるものをノートに書きましょう。」

右の問いをある講座で参加者に出した。一人一つ板書してもらった。

- ①元気な体 ②仲間 ③ことば ④教育
- ⑤愛 ⑥奥さん ⑦子ども ⑧お金 ⑨水
- ⑩植物 ⑪友だち ⑫電気 ⑬お酒
- ⑭人間 ⑮発気 ⑯食べ物 ⑰家族 ⑱火

それぞれ、当てはめて読んでみると、なるほどその通りだと思えるものが多い。

例えば、

「元気な体のおかげで生活できる、無くなったら困る。」

元気な体が無くなるということは、病弱な体になる、ということだろう。年末、私は咳が止まらなく、とても苦しい思いをした。こんな生活は嫌だと思えるぐらいに。

多分、「元気な体」を書いた人は、元気じゃない時を近くに経験した人かもしれない。

要するに、() の中に当てはまるものは、その人の経験によって、左右されるということである。

読書量、読書の内容、知識量、知識の興味、経験量、経験の質などが、同学年の中でも違いや差を生み出していく。

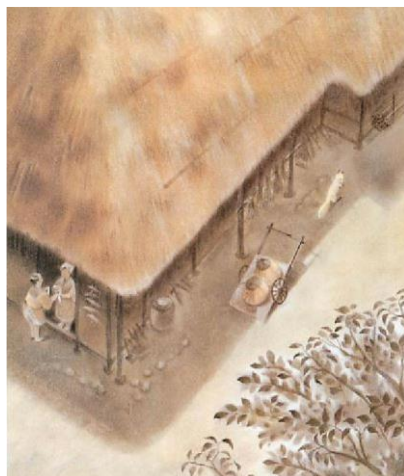
子どもたちの考える力をつけるためには、自分がない考えに触れさせる機会を授業の場で作っていくといいわけだ。

行商のおかげで生活できる

「行商とは何か説明できる人？」

- ・ 店ではなく自分から売りに行くこと。
- ・ 行って商売すること。 など

「行商が小学校の物語にも出てきます。」



東京書籍版の「ごんぎつね」(絵：黒井健)のさし絵(右絵)を紹介する。

「行商がないと困る人は、どんな人ですか。」

- ・ 自分で動けない人。 ・ 僻地の人。
- ・ お年寄り。 ・ 田舎。 など

この後、山形県の西川町で行商をする鮮魚店の古沢健也さんを紹介する。

第32回FNSドキュメンタリー大賞ノミネット作品（製作…さくらんぼテレビ）

『行商がつかぬものゝ地方創世の未来とは』

山形県西川町の「まるみつ」は新鮮な魚介類をトラックに乗せ「行商」をする町内唯一の鮮魚店だ。店主・古沢健也さん（62）は週に4日、新鮮な魚介類や惣菜をトラックに載せ町内を売り歩く。代々続く行商を始めて43年になるが、10軒近くあった業者は「まるみつ」だけになってしまった。車もなく重い荷物を運んでほしい人、古沢さんとの会話を楽しみにしている人など：古沢さんが支えているのは食だけでなく、お年寄りの暮らしだ。

早朝から市場で仕入れをし、行商は夜まで続く多忙な商売。古沢さんは「なんでこんな商売をやっているのだろうか」と弱音を吐くことも。それでも客からの「行商のおかげで生活できる、無くなったら困る」との声を励みにハンドルを握る。行商を続ける原動力は、こうした必要とされる喜び、そして客との触れ合いという生きがいだ。

この後、僻地問題にないと困るものとして、医療・教育を扱っていく。

ちなみに、僻地の医療問題を扱う時、思い出す物語文がないだろうか。

そう「モチモチの木」である。

二人きりの家族のじい様の夜の腹痛に対して、六歳の豆太は、ふもとの村まで山道を裸足で駆け下りていく。しかも連れてくる医者も高齢なのである。（医者様が亡くなったら…）

僻地に住む人に必要なものとは

上記のドキュメンタリーは、朝（二時半頃）ジムで走っている時に、たまたま流れていたものである。

僻地問題をいつか授業化したいと考えていた。僻地への救急医療、僻地への本を届ける図書館の活動（ブックウーマン）、そして、僻地への行商の三つが揃い、これで授業化できると思えたのである。

僻地に住む人たちにとって必要なものの第一は、やはり食べ物だろう。食べ物（飲料水も含む）がなければ、人は生きていけない。

次に必要なものは、医療ではないだろうか。

（衣料ではない。）

そして、食と健康が担保された段階で、さらに必要なものが「教育」なのがある。順序としては、食→健康→教育となるしかない。

ふと思つたことは、僻地で教育を受けることで、僻地から出て都会に行くとする者が増える、ということも考えられるわけだ。

無知であれば、現状がすべてであると思い、その現状を変えようとは思わない。

教育の結果によって、知識が増え、よりよい高みがあることを知り、今の現状を抜け出そうと考えることもあるわけだ。

それゆえ、権力を持つ支配者は、教育啓蒙活動に消極的になるのかもしれない。

（ ）のおかげで「 」できる

（ ）のおかげで生活できる。

（ ）のおかげで安心できる。

（ ）のおかげで希望が持てる。

（ ）のおかげで「 」できる。

（ ）や「 」に当てはまるものを考えるだけで、私たちは、いろんなものに支えられて生きていることが分かるのではないだろうか。

【学力研Zoom例会

1月28日（日）午後2時〜3時】

毎月一回、Zoomによる例会を開いています。学力研会員なら参加無料です。

ミーティングID…69330706442
パスワード…6533359

（今回は、丸小野聡暢先生が、「高学年の社会科学」について話されます。）
また、近況の交流もしています。

六、素材研究をする上での土台をつくるには

①社会科（歴史）を始めるきっかけ！

今までお話したことは素材研究の見える部分です。素材研究を支える見えない部分をどう育てていくのかについて今回はお話をしていきます。

「見えない部分」は社会科（歴史）についての知識・教養になります。雑学といっ



てもいいかもしれません。社会科（歴史）の幅の広い・深いものになるように、少しずつ大きくしていくことが肝要です。

この連載の⑦でも少し触れましたが、私は、教育学部でなく農学部を卒業しました。免許は中学校理科です。二十代、三十代は学力研（落ち研）を中心に活動して、多くのことを学ばせてもらいました。「読み書き計算の理解と習熟」の実践が柱でした。

四十代になり、岸本先生の理論と実践の「見える学力」の部分だけでなく「見えない学力」についても意識的に実践したいと思うようになりました。岸本先生に、「学校で育てる見えない学力」という講演もしてもらいました。講演内容は「100マス先生の遺言」（清風堂書店）に書かれています。岸本先生の読書量や教養の幅の広さにはいつも感心するばかりでした。「若い教師は雑学に精を出したらいい」といつも話をされていました。「勉強これですきになる」の「若い教師に」の部分で述べられています。この雑学こそ、素材研究の「見

えない部分」だと考えています。三十代のはじめ頃岸本先生に連れられて、奈良の「佐紀古墳群」を周ったことがあります。岸本先生の話を聞き、歴史に興味をもちました。

講演レジュメの中の社会科の部分では（一）学校で育てる見えない学力
社会・時事ニュースの紹介。地図・地球儀の常掲、話題のグローバル性とローカル性、地名・人名・外来語の日常化、歴史や地理の書物の推奨、社寺・史跡・博物館の見学、農作実習と書かれていました。

これを参考に自分なりに「見えない学力」の社会科部門について研究しようと決めました。

社会（歴史）にした理由がもう一つあります。三十代から四十代に、高学年五・六年を担任することが続きました。特に六年の社会を教える時に困りました。歴史の基礎的知識や教養が全く足りていませんでした。教科書に書かれている内容をただ表面的に解説し、板書をして終わりという授業をしていました。二十代三十代と理科・国語・算数についてはそれなりに勉強してき

ましたが、社会の勉強が不足していたのです。そこで、社会の歴史にしばって、「見えない学力」「教科指導社会科」「授業づくり」を学びの中心にすえてスタートしました。

② 見えない学力研究会を立ち上げる

神戸落ち研の仲間と「見えない学力研究会」を立ち上げました、学力研は、会員の要望でいろいろな部会を運営することを行っています。一年生部会は今年度も活発に講座を開かれていました。ほかにも多種多様な部会が会員の要求で組織されています。一人で学ぶより、仲間と共に学ぶことで継続できるし、深く学ぶことができます。講座を開くことで、他の会員の参加を呼びかけて、より広い学びになります。

見え研主催で、歴史の授業について歴教協の大阪府の系乗政治氏、兵庫県の岩本賢治氏などの実践家にきてもらい学習会をしました。

神戸の落ち研のメンバーと、歴史授業七十時間分の指導案や資料づくりなどを神戸落ち研の例会とは別に二ヶ月に一度集まって研究会を行いました。

③ 神戸歴史クラブ結成に参加

歴史授業を構想する上で、大事にした視点は「地域の歴史」を授業の中にどう組み込んでいくかです。神戸の歴史に造詣の深い田辺眞人氏の講演会に参加したことをきっかけに神戸歴史クラブの結成に加わることができました。それから約十年、神戸の史跡の見学や講演会に参加することで、地域の歴史を学ぶ機会を得ました。文化財の専門家からも学ぶ機会もありました。

④ 実践家から学ぶ

社会科に関する民間教育団体では、歴史教育協議会（歴教協）の全国大会にも何度か参加したり、発行されている「歴史地理教育」を購読しました。

授業づくりにおいては、とても興味をひかれたのは、有田和正氏の実践です。おもしろいネタをみつけて、授業にもちこむ手法には魅力がありました。全国各地で有田講座はありましたが、私は宇部で夏休みに開催される会に数年間通いました。その会は、一日目に近くの学校の子どもが参加して有田先生が授業をするのです。その授業を参観することで、授業構成だけでなく子

どもとの対応力の勉強になりました。

色々な研究会や立場の実践家書かれた書籍もできるだけ読んで教材研究の質を上げることを意識しました。

⑤ 歴史の専門家の話を聞く

これまでの連載でも書いてきたように、教科書の情報は日々変化しています。大学の研究者・博物館の学芸員の方など、書籍や論文から学んでいかないと教科書だけを読んでいただけでは深まっていきません。

歴史学研究の最新の情報を知る努力が求められます。専門書を読むだけでなく、本を書かれた方の講演会やセミナーにも積極的に参加する必要があります。本を読んでも聞くと、聞いてから本を読むという往還をすることで内容理解が進みます。県や市の広報での歴史講座。NHKや新聞社のカルチャーセンターがあります。コロナ禍でオンラインやオンデマンドの講座も充実してきました。ZOOM配信で遠くの博物館や大学や研究機関の講演会や研究発表も聞けるサービスが増えてきています。無料のものもあるので上手に活用することで、素材研究の手助けになります。

学力研 第17期 先生のための学校・オンライン 四回目 報告

丸小野 聡暢

【講座A】「できる、わかる、つなぐ」

李詩愛「書くことの楽しさ」

（学力づくりで学級づくり）

ノート指導を学力づくり・学級づくりの1つの柱としています。その中で、大事にしていることが2つにあります。

①「ていねいさ」

美しいノートや字は心地よいという文化を子どもたちにつくります。特に4月は、どの学年を担当しても「ていねいに書く」ことを意識させ、「書くスピード」も大切にしています。はじめは、先生と同じ速さでゆっくり書くことが「ていねいさ」につながることを伝えていきます。また、子どもに求めるだけでなく、先生自身も板書を丁寧を書くことを心がけています。丁寧にかけて喜ぶのは、子どもだけでなく、保護者からも喜ばれます。

②「自由さ」

子どもたちが楽しく書くためには、「自由」さが必要だと考えています。型通りに当てはめていくワークシートにはない良さがノートにはあります。大事なことをメモしたり、自分でアレンジしたりしてオリジナルのノートをつくることができます。ノートは学びのあしあとだと伝え、書いたことの積み重ねを大切にしています。

このようなことを大切にしながら、社会や理科では無地のノートで書く力をつける取り組みをしています。

《受講者の感想》

・ノートへの文字化、記入の自由度、思考を鍛える意味で大切だと思いました。自らが丁寧に書く、猛省しました。

・3年生でも無地のノートにあんなにきちんと書くことができるんだと驚きました。自分で工夫できることが楽しんで書くこと

につながっているんだと思いました。

・理科や社会科での無地のノートを活用することで、文字をまっすぐ書く力、字の大きさを整える力に加えて、自分なりに考えて書く力を身につくことにつながるということに、やってみたいと共感しました。

【講座B】「教材解釈 授業実践」

（授業づくりで学級づくり）

吉田雅直「どの子も伸ばす体育」

なわとびとさかだちのすすめ」

体育の授業を年間指導計画通り進めると多様な運動を経験できる反面、体育が苦手な子にとっては、習熟する前に種目が変わってしまい、苦手意識から抜け出すことができません。どの子も伸ばすためには、どこかの単元を準備運動として年間を通して取り組むことで、苦手な子も習熟をすることが出来ます。おすすめの単元が「なわとび」と「さかだち」です。どちらも短時間で継続することが出来る手軽さがあります。努力が成果に比例し、子どもたちが成長を感じることが出来ます。そのため、教え合いが生まれやすく、互いに成長を認めるこ

とで学級づくりにもつながります。また、習い事などの家庭環境による格差が少なく、みんなで取り組むことができます。それぞれのポイントを簡単に紹介します。

①なわとびのすすめ

- ・跳躍：垂直につま先で跳ぶ
- ・回旋：脇をしめ、手首で回す
- ・連動：跳躍と回旋のタイミング
- ②さかだちのすすめ

・うでピン、あご出し、背中反らせて、足だけトン、片足ずつ静かに下ろす

「どの子も伸ばす覚悟」、「できないを科学する心」、「無理なく続ける工夫」の3点を意識するとこれら以外の取り組みにも生かすことができます。

《受講者の感想》

・体育では、めあてをきめるだけではなく、科学的にのびしてあげられるように自分自身の勉強不足を感じました。

・体育で、技がどうつながっているのか、柔軟性や腕の支える力が必要なことを映像で学ばせていただきました。ブリッジが大切で、子ども達にもわかるネーミングで、目あてがわかりやすかったです。

・体育の学習でも、苦手な子にとつたら習熟しそうな時に競技が変わっていつてしまうという課題に対して、年間を通して続けられるものを取り組むという解決策を示してくださいました。

【講座C】「学級活動や学級会などで

根無信行「学習を中心に自治ある学級を
目指して小学校卒業までにできること」

この時期の6年生は大きな行事も終わりで、学級をつくる時ではないですが、卒業までどう伸ばすかを伝えられたらと思います。

「学習を中心に自治のある学級を目指す」

子どもたちに学校に来ている理由を聞いてみたら、「勉強、給食、友達、楽しい……」などありましたが、一人の女の子が「みんなで勉強をするところ」と書いていました。学校は勉強をするところですが、「学校はみんなで〇〇をするところ」という感覚を感じてくれる学級になってもらいたいです。そのために、普段からできることは学習を中心に学級づくりをすることです。また、自分のクラスだけでなく、学年・学校で位

置つけがあるとさらに良いのではないかと思います。

自治とは、自分たちの集団を将来輝く目的地を決めて、それを共有して向かっていく力です。（集団・目的地・共有）特に、行事の多い6年生は、行事に追われるのではなく、行事の隙間、教科の時間を活用することで学級づくりに取り組むことができます。学級づくりに使える時間は特活で学級会を開くことだけではなく、漢字・さかのぼり学習・自主学習・図工などでもできます。行事や奇をてらった取り組みで学級づくりをしていると、転入生が来たときに、出来上がった学級に入るのは難しいので、普段から「みんなと一緒にやっている雰囲気」を大切にしています。学級づくりの比重を行事に置くのではなく、日常の学習を通じて学級づくりを行うことで、どの学年でもどの学校でも取り組める汎用性のある学級づくりを行うことができます。

《受講者の感想》

・自治的集団に、教科指導の中での工夫を様々学べました。仲間とともに学ぶ視点を大切にしていきたいと思いました。

・今年高学年担当です。根無先生の自治集団作り納得しました。

・高学年は受けもったことがないのですが、みんなで勉強する時間を共有してたのしむことは1年生でも共通することなので、3学期からがんばっていききたいと思います。

・高学年の学級作りでは、上記のような取り組みが、子どもたちの達成感や、共に学んでいるという実感につながり、そしてそれぞれの取り組みがつながることで、自治のある学級へと育っていくというイメージを持つことができました。

久保校長先生より

学力研は研究会ですので、先輩が行ってきた実践に自分のものを付け加えて追実践をすること、教師自身が大きく成長し、これから何十年も教師を続けていく中で大切なことを確立していくことができます。

読み・書き・計算は子どもの基礎基本ですが、教師の基礎基本は、発問・板書・ノート指導です。教師が技を確立すれば、今後指導をしていく中で、子どもたちの成長に合わせてステップアップしながら指導する

ことができるようになります。

今日は、李先生が中学年でしっかりとノート指導をされていたので、子どもたちに力が付いていたことが分かったと思います。その子どもたちが、高学年になったときは、自分のノートをつくるのが楽しみになる子どもが育っているはずですよ。ここからは、みなさんに考えてもらいたいと思います。

現在は、タブレット学習が行われています。ノート指導と対極にあるようなものですが、今の段階ではノートをつくらせて、タブレットを使える子にも育てなければなりません。しかし、現状は先生たちによつて指導が異なり、受け持った子どもはそれぞれの指導を中心に授業を受けた子が混在をしています。どちらも秀でていればいいですが、そうでない場合がほとんどだと思いますので、どのように指導をしていくのが良いかということですよ。例えば、国語はノート指導ができるまではノート指導を続けて、違う教科でタブレット指導をしていくという使い方がよいと思いますが、現場の先生方の考えはどうでしょうか。

《受講者の全体感想》

・学力研が、共同で鍛えると言った考えの基に行われていると知って、とてもよいことだと思いました。また、日本がこれまで培ってきた教育を大切にするといった考えも共感しました。

・タブレットの件は、悩ましいです。お話しにあつたように、教師各個人に委ねるのではなく、日本全体として、もう少し方向を示していただかないと、学校差、地域差、広がっていくと思いました。

・タブレットについては、皆で意見を共有するとき、写真を使うとき、保護者に伝える必要も有るとき、等に用いています。

・教育を共有に変えていくことが学校に行く本当の意味なんだと実感しました。みんなで勉強することの楽しさや意義を伝えていきたいです！

・今日的な話題も含め、読み書き計算ノート指導、体育での習熟課題、学級自治を考える機会になり、とてもよかったです。

・先生方の熱心な取り組みを聞いて、最後まであきらめず取り組みたいと思います。ありがとうございました。

冬のフォーラム『つまずきを科学する』に参加して

～報告内容をまとめる～井川 有香子

会場で「対面型の講座、楽しみですね。」の声が聞こえる中、期待に胸が高鳴りながら迎えた、久しぶりの会場でのセミナー。

パワーポイントを使わず、報告のレジュメとホワイトボードを使うだけの発表でしたが、発表が15～20分、その中に、参加者同士の交流時間も適宜あって、会場は盛り上がりつつありました。また、報告の後の5～10分の質問タイムで、参加者も自由に発言でき、対面型の講座は、発表者の思いや熱が伝わり、臨場感があつて、最高でした。

荒井先生の『考える力をつけるための授業の組み立て方』の講座では、理科の授業の導入でされている、考える力をつけるための取り組みの紹介から始まりました。授業の中で子どもたちの思考が停止するという『つまずき』を解消していくためには、頭の中に、知識（語彙）があつて、その知識を抽象化して整理整頓、その後、分析していくという力

をつけていくことが大切だと報告されていました。冷蔵庫の中にあるもの（共同の知識）から、まな板（共有のワーキングメモリ）を使うものを取り出し、切る順番を考える（抽象化）……と例えられ、思考につなげることを考えながら、日々、授業を組み立てる大切さを教えていただきました。

川崎先生の『個別指導を通してみてきたつまずき』の講座では、まず、脳トレのゲームで頭をほぐしてから、個別指導で気づかれた子どもをつまずきを話されました。

教師の指示がずっと聞けない、机の上が整えられない、タブレットをしまわない、そのことに対しての指導の仕方が先生によって違うという話や、「教えてあげる」というスタンスでいくより、「これってさあ」と子どもから言ってくる雰囲気大切にするなど、「学習規律に対する捉え方の変化」、「子どもに対しての教え方の入り方の変化」について、ま

ず話されたのですが、うなずけることばかりでした。その後、算数用語の理解について話されたのですが、この話は、荒井先生の抽象化することの大切さ（数量の概念、数感覚、文章から場面を想像できない等）につながる報告でした。

岡本先生の『教師としてつまずいたからこそ見えてきたこと』の講座では、保護者対応・子ども対応について、初めてつまずいたことから考えたことを伝えてくださいました。

自分自身が倒れないために、職場の同僚以外で話せる人と話すこと、そういう環境をもっていることで、「教師と言うのは結果を求めてしまう仕事だけれど、平行線ってこともある」、「保護者をクレイマーにしない対応」を教えてもらって、気持ちが軽くなったと言われていました。

また、学級全体を崩さないために、心地よさを大切にしようと考え、脳科学の本を読んで、セロトニン・オキシトシン・ドーパミンという三つのホルモンがあつて、そのホルモンが出ていると「幸せ」を感じやすいと知って、実践を考えて実行しているとの報告でした。「ありがとう」と言う言葉を大切にして、他

人は変われないから、自分を変えていくこと、つまり、周りの子ども達を「流されない子に育てる」という実践をされていて、いつかこの実践を本に書きたいと言われていた岡本先生に、私もがんばろうという力をいただきました。

鈴木先生の『算数文章題が解けない子どもたち』の本のアセスメント「たつじんテスト」から分かったこと』の講座では、二つのたつじんテストからアセスメントしたことを報告されていました。

① 図を見て相手の側に立って右手か左手かを答える問題に間違いが多いことや、赤ちゃんを背負っている絵を見て、「赤ちゃんを背中のせている」と答えてしまうなど、『子ども自身が日常で身につけているはず』という言葉理解から見直す必要があること。

② わり算は大きい数を小さい数で割る・かけ算は増えるという誤ったスキーマが問題を解くときに邪魔になっているということ。

① や②のように言葉や誤ったスキーマで、つまづいている子どもたちは、実生活の内容が貧弱になっているのではないか、実生活の体験に格差があるのではないかと考え、その

中で教師はどうしていけばいいのかを考えていく必要があるという報告に納得できました。

金井先生の『学力テストからこどものつまづきを考える』の講座では、学力テストの正答率からの考察を聞かせていただきました。ジューズを半分に分けると果汁の割合も半分になると誤答したり、数値を変えるだけで誤答が増えたり、底辺・垂直・高さなどが理解できていないと解けない問題など、川崎・鈴木先生のお話とつながりました。

岸本先生の『幼児期をコロナ禍で過ごした一年生の学力づくり』の講座では、二・四歳をコロナ禍で過ごした一年生は、集団での遊びを経験しておらず、負けるとけんかになったり、出来ないことがあればすねてやめたりする、なわとびができない等と分析、対人関係の希薄さや体の固さ、手先の不器用さを克服させるための実践を続けていると話されていました。見えない学力の大切さが浮き彫りになった講座でした。

宮川先生の『五十年担任をして気づいたこと』の講座では、目の前の子ども様子をしっかりと見て何が必要か、どう接したらよい

か考えることが大切で、人のやり方をそのままやるのではなく、自分のクラスだったらどうしていくといいのか、なぜそうするのかの根拠をもって実践することを楽しくわかりやすく話されていました。特に、「子どものがんばりを何でもほめることが大切。つまづきはどこかを本人に気づかせること、その子の気持ちができるような問いかけをすること。」というところが心に残りました。

深澤先生の『伸びる先生の共通点、大学教員をしてから学んだこと』の講座では、伸びる教員は、「向上心、子どもの求めに誠実に対応できる、継続力、人・本から学ぶ人、聞く耳をもつ（素直さと頑固さを併せもつ）、仲間がいる、この仕事を楽しめる」をもつ人。また、見えない力をどれだけ育てられるかという話もされました。

最後に久保先生が、今最も困難な時代を教師として生きている私たちだけけれど、子ども・教員仲間・教科書この三つを大切に学級づくり、学力づくりをがんばっていかうと話され力をもらいました。書ききれない内容もありますが、学力研の皆さんのパワーを感じた一日でした。

局長だより 1月

◇学力研最新情報 岸本ひとみ



○新しい取り組みを

下記にもあるように、年末には完全対面の学習会を久々に開きました。参加された方の感想を見ると、やはりその良さをひしひしと感じておられるようです。

明けましておめでとうございませう。みなさんがこの学力研の広場をご覧になるのは、ちょうど3学期の始業式の頃でしょうか。

辰年は、「物事が目に見えて大きく動き、変わっていく年。今までの流れに囚われない、良くも悪くも予想外の変化が起こる一年になる」と言われています。干支でいうと「甲辰（きのえたつ）」。『甲』は「木の陽の気」で、植物が殻を破って芽を出した様子を表す文字とされています。

コロナ禍をようやく脱出して、新しいものが芽吹く年ということになるのでしょうか。

対面の学習会、オンライン、ハイブリッドとそれぞれの長所短所があります。この三年間で、いろいろ工夫しながら手に入れたやり方で、学力研の実践を一番効果的に伝えられるのは、どれなのかを、その時々で検討していきたいと考えています。

沖縄や北海道、九州にお住まいの方には、オンラインやハイブリッド形式で、日帰り参加の可能な地域にお住まいの方には、対面形式で、さまざまな形式の学習会や講座ができて、今からワクワクしています。

会員の方で、学習会を開きたいので、講師を派遣してほしいという要請にも応えられる情勢になってきました。遠方の方、ぜひ、手を挙げて下さい。

◇事務局だより 岡本 美穂
12月26日(火)

冬のフォーラム

久しぶりの対面講座でした。ご感想です。

向上心、誠実な対応、継続力、人・本から学ぶ、聴く耳を持つ、仲間の存在、この仕事を楽しいめるか：自分が持たないといけない力、決めないといけないことだと考えていました。

伸びる先生の共通点をグループで考えることで、今日お話しされた先生方のお話を振り返ることができました。自分自身が伸びていくために何が大切なのか、心にためる3学期をがんばろうと思いました。とても勉強になりました。クラスの子どもたちを思い浮かべて、もつというんなことに共にチャレンジできる3学期にしたいな、大いに楽しもうと決意しました。パワーをいただいて感謝です。

教師という仕事にわくわくで

きる時と絶望する時とあります。でも、今日の会のおかげでとても元氣になりました。読書もし、レポートも書き、もつと成長したいなと思いました。

私はどういふ先生だろうかと考えた。「見えない学力」に目を向け、子どもたちが本当の意味でいきいきと学習にむかえるように、力を尽くせる教師になりたいと考えます。

見えないところではあるけれど、「ツツ」継続することが大切。一緒にがんばる仲間も必要。

●第7期先生のための学校

●次回：1月20日(土)

<https://www.kokuchopro.com/event/ab3a6ab09e92acd8a0af04775da00c60/>

●2月10日(土)

<https://www.kokuchopro.com/event/8adf016597b91ec5c4514c8a54e236c37/>

ぜひ、「参加ください」お待ちしています。

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2024年 1月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

1/

- 19 (金) 春日井学力研 18時半～ レディヤン春日井(JR 勝川駅) 山口 080-6904-1697
20 (土) みなみ学力研 9時半～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp
21 (日) 神奈川学力研 10時～12時 県民サポートセンター704号室(横浜駅西口) 湯浅 090-1104-4667
26 (金) いろえんびつ(加印) 18時半～ 稲美町ふれあい交流館 岸本 090-9117-6330
27 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等にご連絡下さい。

- 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830
○ 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

○ 学力研・先生のための学校【全6回】

9月 9日(土) 13時半～15時半【済】 10月14日(土) 13時半～15時半【済】
11月11日(土) 13時半～15時半【済】 12月16日(土) 13時半～15時半【済】
2024年 1月20日(土) 13時半～15時半 2月10日(土) 13時半～15時半

○ 1年生講座

1月27日(土)

(詳細はメルマガ、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp
李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com
堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com